

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350715

研究課題名(和文) 体育・スポーツ指導者養成における代行分析能力の養成方法の構築

研究課題名(英文) Creation of Methods for Development of Conceptualization Abilities in Fostering Physical Education and Sports Coaches

研究代表者

中村 剛 (NAKAMURA, Tsuyoshi)

筑波大学・体育系・准教授

研究者番号：60341707

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：近年わが国では教育改革への気運が高まり、体育系大学には、専門的な資質と能力を身につけた体育・スポーツ指導者の育成が強く求められている。とりわけ学習者一人ひとりに見合った運動の指導目標像を構成する能力である「代行分析能力」の養成は重要な課題の一つである。

そこで本研究はこの能力の養成方法論の確立に向けた基礎資料を得ることを目的として計画・実施された。その結果、この能力の地平構造と、学習者に見合った運動の指導目標像を構成する上で、指導者にどのような動感志向性が必要となるのかを明らかにすることができた。本研究の成果は、この代行分析能力の養成方法論に大きく寄与するものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：In recent years, there have been strong demands placed on physical education universities to develop physical education and sports coaches with specialized talents and capabilities. Fostering the ability to conceptualize the image of physical activity targets of learners, which is an ability to create physical activity guidance targets tailored to each learner, is an important issue.

This research was planned and conducted for the purpose of gaining fundamental resources for establishing a development methodology for this ability. As a result of this research, it was possible to clarify what type of kinesthetic intentionality is needed for creating a structure of horizon for that ability and an image of coaching targets tailored to each learner. It is believed that the results of this research can make significant contributions to development methodology for such conceptualization abilities.

研究分野：身体教育学

キーワード：代行分析能力 観察分析能力 交信分析能力 促発身体知 例証分析

1. 研究開始当初の背景

(1) わが国における教育改革の動向

近年わが国では教育改革への気運が高まり、平成18年に60年ぶりに教育基本法が改定された。その後、平成25年度までに、小学校、中学校、高等学校など、すべての学校において新学習指導要領が実施され、教育改革の波は大きく広がっている。

(2) 指導者の資質・能力への関心の高まり

このように大きく拡大しつつある教育改革の流れのなかで、教育の主体である教員について「教員養成課程6年制」が検討されたのはそう昔のことではない。また「教員免許更新講習」は継続的に実施されており、教員の資質・能力の向上が、強く望まれていることは確かなことである。

このような社会的情勢において、体育・スポーツ指導者の養成を担っている体育系大学では、確かな専門的指導力を備えた即戦力の人材を育成することが以前にも増して重要な課題となってきた。

(3) 指導者養成方法論の現状

スポーツ運動学 (Bewegungslehre des Sports) の鼻祖である旧東ドイツのマイネルが、体育・スポーツ指導者の専門的能力として、運動観察能力 (Beobachtungsfähigkeit für motorische Abläufe) と運動共感能力 (Fähigkeit zum Mitvollziehen der Bewegung) の重要性を指摘して以来、すでに半世紀以上が経過している。

その後、スポーツ運動学は、わが国において現象学を基礎づけとした超越論的発生運動学へと発展を遂げ、それとともに、指導者に必要な専門的能力は、学習者の動感志向性を分析する能力と捉えなおされ、前者は「観察分析能力」、後者は「代行分析能力」と呼ばれるようになっていく。

このわが国における運動学の発展によって、近年、体育・スポーツ指導者の専門的指導力を取り上げた研究が散見されるようになった。しかし、そうした研究はまだその緒に就いたばかりであり、この分野の研究が十分進んでいるとは言えない状況にある。

さらに、指導者養成機関において、この専門的指導力をどのようにして身につけさせるのかということについて検討した養成方法論的研究は、ほとんど手つかずの状態にあるといっても過言ではない。

2. 研究の目的

(1) 代行分析能力に関する研究の現状

マイネルは、1960年代にすでに指導者養成機関において「運動観察能力」や「運動共感能力」といった専門的指導力を、計画的かつ組織的に養成する必要があると主張している。それから約半世紀たった2002年に、金子は、マイネル運動学の真意を汲んだかたちで、フッサー現象学 (Husserls

Phänomenologie) を基礎理論に据えた「発生運動学」を体系化し、指導者に必要な専門的指導力を、超越論的な動感志向分析の能力と位置づけるとともに、その能力性 (Vermöglichkeit) の構造体系を明らかにしている。

そしてそこでは、マイネルが指導者に不可欠な専門能力として掲げていた「運動共感能力」は、学習者に代わって目標とすべき動感目標像を構成化できる「代行分析能力」 (kinästhetische Vermöglichkeit zur stellvertretenden Schematisierung der Kinästhesiomorphe) と捉えなおされ、現場の指導者にとって必要不可欠な能力と位置づけられている。また金子は、その著書『身体知の形成』のなかで、この能力の養成方法論に関する研究が急務であることを強調している。

(2) 代行分析能力の養成方法論の構築に向けた例証分析的研究の不可欠性

金子の現象学的運動学において、マイネルの主張していた「運動共感能力」が「代行分析能力」として新たに捉えなおされたことにより、体育・スポーツ指導者にとってどのような専門的能力が必要なのかということが、これまで以上に鮮明に捉えられるようになった。そしてそうした成果は、指導者養成方法論に対して、非常に大きな貢献を果たしていることはいうまでもない。しかし、この「代行分析能力」を始めとした専門的指導力に関する研究は、まだあまり行われておらず、その養成方法論を確立するには、この能力に関してさらに実践的な研究を積み重ねていく必要があると考えられる。

そこで本研究では、このような「代行分析能力」に纏わる学術的背景を踏まえた上で、指導現場の実践事例を取り上げた例証分析的研究 (Exemplifizierungsanalyse) を実施することで、この能力の本質法則 (Wesensgesetz) を解明し、その養成方法論の構築に寄与しようとした。

3. 研究の方法

(1) 分析対象としての促発能力について

本研究で主題化される「代行分析能力」は、促発能力 (mäeutische Vermöglichkeit) の一つである。これは「生徒や選手の志向体験を触発し、その動感図式の発生を促すことができる指導者自身の身体能力」であり、金子はその構造体系を明らかにしている (図1)。

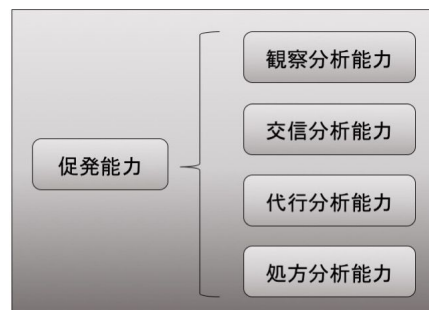


図1：促発能力の構造体系

なお、「代行分析」は、「観察分析」、「交信分析」と並んで、動きを指導する際に必要となる動感素材 (kinästhetische Hyle) を収集するための手段と位置づけられる。とりわけ、本研究で対象にしている「代行分析」は、「観察分析」と「交信分析」によって集められた動感素材を形態化し、そこに動感指導目標像を捉えようとするものであり、学習者に見合った指導 (処方分析) を展開する上で必要不可欠な指導者の専門的能力と捉えられるものである。

(2) 自然科学的方法の放棄と現象学的研究方法の採択

促発能力とは、いわゆる科学知 (エピステーメ) とはまったく異なった、暗黙知と近接関係にある身体知と捉えられる。金子は、このような身体知を「今ここのわが身に感じとられる本原的所与性をもつ有体性のなかにしか存在しない」とその特徴を明らかにしている。だから、このような身体知としての促発能力を明らかにするにあたっては、外部視点を固持する自然科学的な方法は放棄せざるをえない。それ故、本研究では、「代行分析能力」を解明する上で、そういった方法を避け、われわれの有体的な (leibhaftig) な内在経験をすべての起点に据えて、そこに本質法則を探ろうとする超越論的現象学 (transzendente Phänomenologie) の立場に立脚することになる。

(3) 研究方法としての超越論的反省分析

本研究では、「代行分析能力」を明らかにするために、超越論的な反省分析 (transzendental Reflexion) という方法が用いられた。

フッサールも述べているように、「反省の課題は、もとの体験を反復することではなく、それを観察し、そのうちに見出されるものを解明すること」である。そして、そこでは「『以前の体験へと遡って関係する』という志向的な性格において、他でもないまさにこの以前の経験が意識され、場合によっては、明証的に意識される」ことになる。

しかし、超越論的な反省を遂行するには、そこに徹底した現象学的態度が貫かれる必要がある。フッサールは、このような態度について「世界のうちに自然に入り込んで経験し、何らかの仕方では生きていく自我」のうえに、「現象学的な自我が『無関心な傍観者』として立てられることによって、一種の自我分裂 (Ichspaltung) が行われる」と述べている。いわば、このような超越論的反省においては、「以前の体験を今ここに引き寄せつつそれを生きる自我」と「その体験を生きることそのものを『無関心な傍観者』として眺める自我」を分離するような態度が極めて重要になる。そして、このような態度での反省分析によってはじめて、研究者は自らの先入観から解放され、反省に基づいて、内在的な

促発身体知について、その本質をありのままに記述すること、すなわち純粹記述が可能になるのである。

4. 研究成果

本研究の成果は、国際学会において発表されるとともに、その報告論文を含む3本の論文として公表された。なお、平成27年度に発表された論文「マット運動における倒立の動感発生に関する様相化分析」は、本研究の最終的な成果を踏まえたものであり、また「代行分析能力」の養成方法論を検討する上で、重要な内容を含んでいると考えられる。以下、この研究成果についてまとめておきたい。

(1) 問題の所在

一般に指導といわれる行為では、そこを何かを学習する相手がいる。つまり、指導という行為は、学習という営みと切り離して考えることができない。

学習とは「経験によって新しい知識・技術・態度・行動傾向・認知様式などを習得すること、およびそのための活動」である。そのため指導では、学習者にそれらを身につけさせることが中核に据えられる。ところが、それらを身につけるのは、指導者とは別の人間であるから、指導者はまずその相手を理解することが求められる。こうしたことは体育・スポーツにおける運動指導でも事情はまったく変わらない。学習者に見合った指導を施す上で、指導者は相手が動きかたを覚えつつある世界、すなわち学習者の動感志向性を無視できないのである。

このように学習者の動感志向性を捉え、今の感じではうまくいかないとかもう少しこんな感じでやった方がいいなどと教えて指導することは「発生分析」と呼ばれる。例えば、子どもがなわとびをしているのを見て、「こんな感じでやるんだよ」と口出しすることがある。それは既に相手の動きかたに踏み込んでいるという点で発生分析である。

しかし、この発生分析にはさまざまなレベルがある。相手の動きかたの違和感を感じるだけのレベルから、相手の動きのどこがおかしいのかを見抜き、それをどう修正すればよいのかを見出すレベルまでである。

ところが、そこにさまざまなレベル差があっても、学習者の動きの感じに共感し、アドバイスを与えることは、指導現場ではごく当たり前のことで、指導者は、そうした指導をほぼ無意識に行っている。そのため体育・スポーツの世界における指導者の発生分析は、自明すぎて、そこで指導者自身が何をどう見て、どう考えたのかといったことはほとんど自覚されない。しかしそれでは、この発生分析能力はいつまでたっても明らかにはならないし、その能力を高める方法論も整備されない。

こうしたことから、この発生分析能力を解

明し、その養成方法論を構築するには、まず指導者一人ひとりが、この発生分析を自明なこととして放置せず、積極的に取り上げて記述することが重要であろう。本研究は、こうした問題意識に基づいて、筆者自身の指導実践を取り上げ、そこでの発生分析の様相を記述することで、この能力の解明と養成方法論の構築に寄与しようとするものである。

(2) 主題への照準

われわれが「運動を身につけた」というのは、過去にその運動ができたことがあるという事実を述べているのではなく、未来の遂行に対して「できる」という確信をもっているということだ。それは、運動をやる前に「私はそう動くことができる」(Ich kann mich so bewegen.)という動感意識が先構成されていることと言い換えることもできる。そして、そのとき運動は、私のなかで「できる」という確信の伴う動感形態(kinästhetische Morphe)として了解されている。だから指導では、学習者に「できる」という確信の伴う動感形態の発生を促すことが主題化されることになる。

なお、学習者が「できる」という確信の伴う動感形態を形成するまでのあいだ、その動感志向性の様相(Modalität)は「否定」,「疑念」,「可能性」をさまよう。そのため発生分析では、学習者が体験している動感志向性の様相変動を捉え、それを動機づけている契機を把握することが必要となる。スポーツ運動学では、こうした学習者の内在的な動感様相の解明を「様相化分析」と呼んで、発生分析に不可欠なものとして位置づける。

本研究は、筆者による器械運動の倒立の指導事例を取り上げ、学習者に「できる」という確信の伴う動感形態が発生するまでの過程に発生分析を施す。なかでも、学習者がどのような動感志向性の様相変動を経て「できる」という確信をもつに至ったのかということと、そうした様相変動を動機づけたきっかけが何だったのかということ明らかにする。これにより、筆者が学習者の内在的な動感発生にどのように関わっていたのかということ、すなわち筆者自身の発生分析能力(代行分析能力を含む)の内実を明らかにしようとしているのである。

(3) 研究の方法

指導者が学習者の動感発生にどのように関わっていたのかを解明するには、学習者の動感体験を主題化しなければならない。このような運動主体の内在体験を分析するには、人間の運動を外部視点から客観的に分析する科学的運動学とは違った方法論的態度を要する。だから本研究では、個人の有体的な内在体験を起点に因果法則とは別種の本質法則を追究する現象学的運動学の立場に立つ。なかでも本研究は、発生論的現象学の分析法である様相化分析に基づき、学習者が

「できる」という確信を獲得するまでの過程における動感志向性の様相変動を純粹記述する。

ここでいう純粹記述とは、学習者の動感化現象の本質を捉えて記述しようとするものだが、それは現象学的な「本質直観分析」に基づくものである。この本質直観分析は以下の三階層に分かれており、第一階層から第三階層へと進むにつれて、動感化現象のより普遍的な本質法則を明証的なかたちで取り出すことが可能となる。

第1階層：自由変更による多様さ点検

第2階層：持続的合致による総合的統一

第3階層：差異化合致の能動的同定

本研究では、学習者が動きの感じを探りながら倒立のコツに出会う統覚化領野の受容発生を取り上げるが、そこで指導者はここをこうしたらどうなるか あそこをああしたらどうなるかと観察・交信・代行を通して考えることになる。つまり指導者は自らの潜勢運動の世界で学習者に共感し、そこで捉えた動きの感じを自らの動感世界で自由変更し、学習者の多種多様な動きの感じを確認することで、「できる」という確信に不可欠な動感素材を絞り込もうとする。それはまさに第一階層の本質直観分析に取り組んでいることになる。

また本研究は、指導者が倒立の指導実践において行った発生分析を取り上げて、そこでの指導者の意図と学習者の動感様相変動を厳密に分析するものであり、それは反省分析というかたちをとる。しかし、それは一般的な意味での反省ではなく、先に「3. 研究方法」のところで触れた、現象学的に基礎づけられた超越論的な反省という意味で理解されることはいうまでもない。

本研究では以前の指導実践を明証的に意識しながら分析するために、練習中に撮影したビデオ映像、指導直後にメモした指導者と学習者の会話内容、さらには授業期間終了後に指導者と学習者がビデオを見ながら行った動感対話の内容を参考資料として活用した。

(4) 分析対象について

ここで取り上げるのはN女子体育大学の1年生を対象とした器械運動の授業における学生Kへの倒立の指導である。授業は平成26年4月から7月にかけて行われたもので、1回90分の授業15回と約2時間の補講において筆者がどのように発生分析を行ったのかということが分析される。

(5) 本研究を通して明らかになったこと

本研究では、学生Kに対する倒立の指導実践を取り上げ、筆者がその動感創発にどのように関わってきたのかということ、すなわち筆者の発生分析能力の内実を明らかにすることが目指された。ここでその結果をまとめ

ておく。

筆者は彼女の倒立の動感形態に、「体幹の保持技術」に関わる動感素材が欠落していると考え、それを補うための指導を開始した。そこでは特に 肩角を 180 度を開いて、肩で押す感じ に焦点を絞り、そのような動感素材を取り込んだ動感形態の構成化へもちこもうとした。最終的にこの技術は、彼女の動感意識のなかで 肩で背伸びするようにして マットを押す感じ という 私のコツ へと個人化されることで、一人で倒立が「できる」という確信を生み出すに至った。

この「できる」という確信は偶発位相の段階にあり、そこでのコツは「危機位相」「洗練化位相」「わざ幅位相」を通して、形態発生を絶対的に保証できるモノドコツへと磨き上げられる可能性を残している。けれども、彼女が倒立を「できる」という確信をもち、この倒立を基礎技能とした倒立前転の練習に進むことができたことを考えると、そこに基礎図式の成立という事実を認めることができ、ここでの指導が動感促発の役割を果たしていたといえる。

なお、彼女がコツを獲得するまでの道程には指導者によって見落とされたさまざまな動感志向性が蔵されていた。当初、筆者は台を使って上半身だけを逆位に持ちこむ練習（図 2）を用いて 肩角を 180 度を開いた支持 の類似動感を体験させ、それを倒立の動感形態にすり込ませようとした。



図 2：台を使って上半身を逆位にする練習

ところが、この練習は類似動感の体験になっておらず、彼女は 肩で押す感じ をつかむことができなかった。そして 肩で押す感じがよくわからないという「否定」から「疑念」へと向かうなかで 肩を前に出す という誤った動感素材に可能性を見出すことになった。また彼女は 肘に目一杯力を入れて つっぱらない という動感を託した筆者の指示を、肘を緩める というまったく違う動感素材へと翻訳していた。

その後、筆者のアドバイスによって肘の使いかたが修正された彼女は、台を使った練習や階段状になった壁を使った練習で外見的にまっすぐな姿勢の倒立を実施できるようになるが、そうした倒立のコツがつかめず、

支持の仕方はいっこうに修正されなかった。そこではコツとの出会いに不可欠な動感メロディーの動感差への気づきが、個別動作を寄せ集めて全体の動きに組み上げようとするモザイク的な動感志向性によって阻害されるという問題が見られた。

こうした彼女の動感志向性を見落としは、筆者の発生分析の甘さに起因するが、とりわけそこには交信分析の不足による代行不成立という問題があったと思われる。この授業には 59 名の受講生がいたが、このような大人数の授業では一人の学習者だけに関わってられないところがあり、全体指導と個別指導のバランスをとるのが難しい。そうしたなかで筆者は、学習者の動感志向性を観察のみによって把握しようとするが多かった。しかし観察だけでは学習者の動感志向性を誤解する可能性があるから、観察分析は交信分析によって補完されなければならないが、この指導ではそうした観察と交信の相補的統一法則が十分機能していなかった。それが彼女の動感志向性の代行分析を不十分なものにし、結果的に余計な回り道をさせていたと考えられた。

（6）まとめ

本研究では、筆者の倒立指導における発生分析に超越論的な反省分析が加えられた。また、そこでは同時に学習者の動感志向性の様相変動についても分析がなされた。その結果、動感促発の過程において、指導者が代行的に捉えた動感志向性と学習者の動感志向性のあいだに大きなズレが生じていたことを明らかにするとともに、そうした問題を生み出した要因も明らかにできた。またそこでは、そうした指導者と学習者のあいだの動感志向性のズレをどのようにして乗り越えたのかということや最終的に学習者を動感発生に導いたきっかけが何だったのかということについても確認することができた。

このように、本研究ではこれまで自明なこととして見過ごされてきた発生分析能力がどのようなものであるのかということを見るみ出したという点で、代行分析能力を含む促発分析能力の本質法則を解明し、その養成方法論を構築することに寄与することができたと考えられる。

引用文献

クルト・マイネル(著) / 金子明友(訳):
マイネルスポーツ運動学, 大修館書店,
1981, 127-130

金子明友: わざの伝承, 明和出版, 2002,
514-532

金子明友: スポーツ運動学, 明和出版, 2011,
304

エドムント・フッサー(著) / 浜渦辰二

(訳): デカルト的省察, 岩波書店, 2007, 69-79

新村出(編者): 広辞苑, 第六版, 岩波書店, 2008, 498

エドムント・フッサー(著)/山口一郎・田村京子(訳): 受動的綜合の分析, 国文社, 1997, 45-70

金子明友: 運動感覚の深層, 明和出版, 2015, 234-241

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

T. Nakamura, M. Sato: Die Lehrmethode zur Förderung des Herausbekommens des Kniffs, Dimensionen des im Turnen, Schriften der Deutschen Vereinigung für Sportwissenschaft, Band 242, 35-43, 2015 (査読有)

中村 剛: マット運動における倒立の動感発生に関する様相化分析. スポーツ運動学研究, 第28号, pp.1-18, 2015 (査読有)

中村 剛: 運動指導における超越論的反省分析の重要性. スポーツ運動学研究, 第26号, pp.13-27, 2013 (査読有)

[学会発表](計1件)

T. Nakamura, M. Sato: Die Lehrmethode zur Förderung des Herausbekommens des Kniffs, Deutsche Vereinigung für Sportwissenschaft, Dimensionen des Bewegungslernens im Turnen, Jahrestagung, der dvs-Kommission Gerätturnen (口頭発表), Stiftung Universität Hildesheim, Hildesheim (Deutschland) 2014.9.3

[その他]

ホームページ

www.taiiku.tsukuba.ac.jp

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 剛 (NAKAMURA, Tsuyoshi)

筑波大学・体育系・准教授

研究者番号: 60341707